
この気持ち…

鹽崎 裕

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

この気持ち：

【Nコード】

N1842A

【作者名】

鹽崎 裕

【あらすじ】

高校生になった麻美そして野球部のマネージャーになった。そこで出会った人に恋をしてしまった…。

プロローグ

「麻美もう起きなさい遅刻するわよお」
と家の中で大きく響いた。

「あと5分…：ぐう…：」

「そう！？わかったわ。あと5分だけねって何言ってるの！あんた
今日から学校でしょ！初日から遅刻するんじゃないよ！」

この母親の大きな声で目が覚めた。時計を見た麻美はすぐに制服に着替えだした。

「ヤバッ…もうこんな時間じゃんもつと早く起こしてよお。」

今日から麻美は高校生昨日は楽しみであり眠れなかった。そして新しい学校生活の始まりです。

第1球

「麻美いゝおはよう」

大きな声で麻美は声をかけられた。そして麻美も返事を返した。

「おはよ：あいかわらず朝っていうのに大きな声ね：私も君みたいな元気が欲しいわ：」

「私を他人みたいに君って言わんといて。ちゃんと希美って呼んでよ！私たち昔からの友達じゃん！」

麻美と希美は小学校からの付き合いで、何故か妙に気が合う2人ですいつも遊んでたりする。

そして高校を受験するときに麻美と希美は同じ高校を選んでいた。特に2人で同じ高校を一緒に受けようと言ったわけじゃなく偶然そうになっていた。

「今日から楽しい学校生活が始まるね！初日から元気に行こなあ。」

まだ登校途中なのに物凄く元気な希美だった。

「その気持ちはわからないでもないけどもう少し小さな声で話そ：辺りにいる人がこっち見てるよ。」

それを聞いた希美は辺りを見た。当にいろんな人に見られていた：。

「ヤバッ：」

そお言うとき希美は麻美の手を引っ張り少し走って早めに学校に着いた。

「希美どうしたの！？急に走ったりして！」

「ゴメン：恥ずかしくなって走っちゃった。」

それを聞いた麻美は、

「それならそうとその時言ってよ！朝っぱらから走ったから疲れたわよ！」

希美はもう一度謝り学校の玄関付近に何かあるのに気付いた。そして、麻美を呼んだ。

「麻美見てクラス表貼ってあるよ！えっと私は…2組か…んで麻美は…えっ！？麻美クラス表に載ってないわよ！」

「ほ、本当！？」

「嘘だよおゝ麻美も私と同じ2組だよ」

それを聞いて麻美は少し怒った。

怒った麻美は希美を無視して教室に向かった。

教室に入った麻美が見た光景は初めて見る感じだった。

やっぱり高校かぁ…なんか楽しく過ごせそお。

そんな風に思っていたら後ろから声が聞こえた。

「…麻美ゴ…ゴメンやってえ…許…してえ。」

麻美が許しの言葉を貰うまでずっと謝り続けた。

「分かったから一旦落ち着いて！」

麻美は怒っていることなどすっかり忘れていた。とりあえず希美に小さな声で、

「席に座ろ」

と言って希美を席に座らせた。そしてここから麻美の新しい高校生活が始まった。

第2球

ホームルームが始まった。

担任の茂木先生が軽く自己紹介を済ませたあと体育館に移動した。そして入学式が始まった。

やっぱりこの校長先生でも相変わらず話は長かった…。

そんな感じでボーっとして聞いていたらいつの間にか入学式が終っていた。

早く終ることに越したことはなかったので少し嬉しかった。

再び教室に戻り明日の事を茂木先生が話してくれて学校が終わった。そして放課後、

「麻美いゝ一緒に帰ろ！」

麻美はうんと返事をして教室を出た。そして麻美と希美は一緒に帰った。その帰り道、

「麻美部活どうするの！？高校が終わったら部活が出来なくなるから思い出に一緒に入ろぉ。」

麻美はそうだねと言った。希美は何処の部活に入るかいろいろ考えた。すると麻美が、

「野球部のマネージャーをしよう！やっぱり高校と言えば野球でしょ。」

希美は麻美が言ったことに賛成した。

それで明日にでも見学にでも行って見ようと話し合い希美と別れた。帰宅後、麻美は明日が楽しみでなかなか眠れなかった…。

次の日、学校では部活紹介があった。

野球部ではマネージャーも募集をしていた。

今日も昼までで終わった。

放課後麻美は希美と一緒に野球部に行った。

グラウンドに行ってみると野球部が集まっていた。

練習が始まる前に監督にマネージャーで入部をしたいと言わなくち

やいけないので急いで行った。

行ってみると監督がいて入部をしたいと言った。監督は心から歓迎してくれた。

「暑苦しいかもしれんけどよろしく頼むわぁ」

監督は意外と優しく楽しかった。

これなら楽しく出来そうなので元気な声でお願いしますと麻美と希美は言った。

監督は野球部を集合させ新人の1年生と私たちを自己紹介をさせた。野球部の子が次々と終わり私たちの番が回ってきて先に希美が言った。

「私は、堤 希美って言います。頑張っていきたい思うのでよろしくお願いしまゝす」

相変わらず希美は元気だった。そして次は私の番だ。

「わ、私の名前は：蒼伊 麻美って言います。皆さんの為に頑張るので：よろしくお願いします。」

皆の自己紹介が終わった。

終わった後キャプテンの歓迎の言葉を言ってくれた。

それで、明日からマネージャーの仕事をしてもらおうと監督に言われたのでその日は野球を見学をし、これで終わった。

第3球

次の日、早速マネージャーの仕事が始まった。

意外と大変だった：怪我をしてしまった人を手当てしたり、汚れたボールを磨いたり休憩の時に皆にお茶を配ったりして忙しかった。けど意外と楽しくやっぱやりがいがあった。

それに皆優しく接してくれて本当に楽しいと思え頑張ろうと思った。そして部活が終わる前希美今日は用事があるからと先に帰っていた。

私は帰る準備をしていた。

するとグラウンドの方で小さな音が聞こえた…。

誰がいるんだろお〜と思い外を見てみるとそこには男子が1人素振りをしていた。

麻美は練習が終わったのに何故素振りをしているのか分からなかった…。とりあえず声をかけてみた。

「あのお〜何で素振りをしてるんですかあ〜!? みんなもう帰りますよお〜。」

そこにいたのは今年2年生になった中島 歩君でした。

「蒼伊さんかあ〜：見られちゃったね：俺頑張って練習して甲子園を目指してるんだ！だから毎日居残り練習してるんよ。」

目標を持っていた中島君に対して麻美は、
「中島君練習頑張ってくださいね！応援します。じゃお先に失礼します。」

すると中島君が、

「もう暗くなってるから気をつけて帰りよ！」

と優しく声をかけてくれた。

麻美は、はいと返事をし帰った。

麻美は帰宅途中にこんな子がいるんだと思いながら帰宅した。

次の日の朝、麻美は昨日あったことを希美に話した。希美も、

「ほんな人おるんやなあ」

と笑っていった。

そうだねと返事をして授業が始まった。いつになっても授業は楽し
くならない：麻美は、

「早く放課後にならないかなあ」

と思いながら授業をうけていた。

そんな風に過ごしていたら放課後になった。

相変わらずみんな声を出して頑張っている。

休憩時間になり皆にお茶を配っていたら中島君がいた私は小声で、

「今日も居残り練習頑張ってくださいね。」

と言った。中島君は疲れていてかるく頷いた。休憩が終わりまた練習が始まった。ハードな練習を終えてみんなが疲れ果てて帰ったあとやっぱり中島君は居残り練習をしていた。私は少しだけ見て希美と一緒に帰った。

今日は、部活が休みだったので私は1人で遊びに行った。
カラオケでうたった。

久し振りにこれだけ遊んだのでとても楽しかった。

ファミレスでご飯を食べていたら知らない男の人が話しかけてきた。

「ねぇ君1人！？良かったら俺と飯食べへん！？おごるからいい
だろ！？」

麻美は嫌と言ったが男の人はしつこく迫ってきてなかなか離れよう
とはしなかった…。

「おい！お前！！俺の彼女に何しよん！？」

と私の後ろから声が聞こえた。

振り向いてみるとそこにいたのは中島君だった。

男の人はそれを聞いてブツブツ言いながら去っていった。

中島君は取り合えず麻美の前に座った。そして、

「ここは俺が金払っとくからもう家に帰り…。」

優しく声をかけてくれた。

「けど悪いよ：私が食べたんだよ！私がお金払わなくっちゃ…」

そう中島君に言っていると中島君は伝票を持ってレジに行った。レジのところでは中島君は、

「かってに彼女呼んじゃったからこれはお詫びの印って事で…いいだろ!？」

中島君がそこまで言うので、

「うん! ありがと…じゃあ私…帰るね! また部活で! バイバイ」

そう言って麻美はファミレスからでて家に帰った。

次の部活の日ボール磨きをしていた麻美はファミレスであった出来事を希美に話した。希美は、

「大丈夫だった!?! どうして遊びに行くんだったら私を誘えば良かったのに!」

その返答を聞いた麻美は、

「そうだけどやっぱり久し振りの休みだったから希美も1人のほうが良かったでしょ!」

そう言ったけど希美はブツブツ言いながら麻美に説教をしていた。

麻美はゴメンとばかり言っていた。そんなことを話していたら監督が外で、

「もうそろそろ練習試合があるから出発する準備しろよお…ただし!! 練習試合と言っても気を抜くな! 俺たちは勝ちに行くんだ! ! わかったか! ?」

それを聞いたキャプテンは、

「勝つぞお!! !」

「おお!! !」

みんな気合いが入っていた。

そして、対戦チームのグラウンドに着いた。

麻美と希美は初めての試合だったのでとても楽しみだった。時間がきて試合が始まった。

第4球

試合が始まった。

出場する選手の中で中島君は出場していなかった。

みんな頑張っている私たちも頑張って応援した。

お互いになかなか得点が取れなくて投手戦になった…。

それで8回の表、相手チームに1点をとられてしまった…。

そして9回の裏、2アウト満塁の場面になりバッターは田中君ピッチャーでした。

しかし田中君は9回の間ずっと投げていて疲れていました…。監督は交代を審判にいい、交代の選手は中島君でした。

私は少し嬉しかった。

中島君はみんなが帰ったあとでも居残り練習をしているのを見ているから打ってくれると思った。

中島君がバッターボックスに立った。

ワンストライク、ツーボールになり味方の皆が緊張をしていた。

ピッチャーがボールを投げた時中島君はなんとホームランを打ちました。

みんな大きな声で騒だしました。

試合は逆転をして私達のチームが勝ちました。

中島君は試合に初めての出て初打席がホームランで中島君は感動して泣きながらホームに帰って来ました。

ベンチに帰ると皆にバシバシ殴られていました。

痛そうにも私は思ったけど、痛みより嬉しさのほうが大きかっただろうと思います私と希美は拍手で迎えました。

試合が終わり帰りは賑やかなバスでした。監督も、

「今回は初めての出した試合でホームランを打った中島を祝ってやるぞぉー！！」

みんなも、

「おおー!!!」

試合が終わったばかりなのに元気いっぱいです。

私も中島君の努力がみのったので嬉しくて今日はあまり眠れませんでした。

もうすぐ暑い季節が始まります。

予選に勝ち抜き甲子園にでてほしいなあと思ったりもします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1842a/>

この気持ち…

2010年10月28日04時01分発行